発行日：
2023年3月16日

明治学院大学心理学部　白金心理学会報

さいころ

第15号

2022-2023白金心理学会イベント

- 2022年6月12日
  白金心理学会第15回大会：総会、2021年度奨励費獲得者研究成果報告、田中ゼミ学生広告論文賞受賞報告、学部シンポジウム開催
- 2022年6月25日
  学生部会教育発達学科SC
  春学期新入生交流会
- 2022年7月9日
  学生部会心理学科SC
  春学期オンライン交流会･相談会
- 2022年11月18、24、26日
  学生部会心理学科SC
  新SC募集のための説明会
- 2022年11月26日
  学生部会教育発達学科SC
  秋学期新入生交流会
- 2023年1月27日
  学生部会大学院SC
  心理学研究科交流会「院生とお話ししましょう！」

目次：

会報第15号発行に寄せて	1
第15回大会報告	1
研究奨励事業報告	2
田中ゼミ学生広告論文賞受賞報告	2
学部シンポジウム	3
心理学部の思い出	4
新任教員のご紹介	5
学生部会SC活動報告	6
第16回大会のご案内	6
事務局よりお知らせ	6

会報第15号発行に寄せて

野末　武義先生（心理学部長）

私たちが新型コロナウイルスに翻弄されるようになって、もう3年以上が経過しました。この間、何度かの感染拡大を経験しながら、徐々に収束の気配も感じられるようになりました（この会報が発行される頃も、それが続いていることを願っています）。この間、誰もがこれまでに経験したことのないストレスと思わぬ変化に直面し、戸惑い続けてきたことでしょう。

コロナ禍において改めて注目された概念に、レジリエンスがあります。日本語では、回復力、弾力性、復元力などさまざまな訳語が当てられており、時に「傷つかないこと」や「強さ」と同じ意味として使われています。しかし、家族レジリエンスという概念を提唱した米国の女性家族療法家 Froma Walshは、レジリエンスとは決して「傷つかないこと」や「強さ」を意味するのではないと言っています。深刻な危機に直面したとき、私たちが不安に駆られたり、傷ついたり、絶望を感じるのは当然のことです。その時に、自分だけで乗り越えようとするのではなく、さまざまな人からサポートを得ることによって、それまでは自分でも気づかなかった自分自身の力が発揮され、もがき苦しみながらも乗り越えていく。そして、危機を体験する以前の自分のあり方や人間関係に戻るのではなく、新しい自分に変化・成長し、人間関係もより深まっていく。それがレジリエンスであると言っています。

野末　武義先生

コロナ禍を誰もが予測できなかったように、これから将来私たちがどんな出来事に遭遇するのか、実は誰も予測できません。しかし、何が起こってもそれに向き合って乗り越えていくためには、多様な人々がお互いの違いを理解し合い、受け入れ、支え合っていくしかないのかもしれません。

第15回大会報告

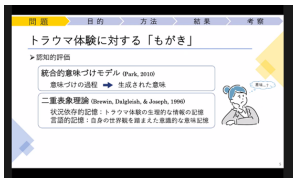
清水　美紀先生（教育発達学科助教）

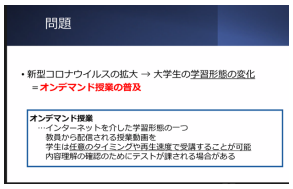
白金心理学会第15回大会が、2022年6月12日（日）に開催されました。新型コロナ感染症拡大を受け、今年度もオンライン形式での開催となりました。

大会当日には、教員、卒業生、大学院生を含む在学生を合わせて、65名の方々にご参加いただき、総会、2021年度研究奨励費獲得者による研究成果報告、田中知恵先生ゼミの学生による日本広告学会「学生広告論文賞」受賞論文の発表、そして学部シンポジウムを開催しました。

はじめに総会では、2021年度事業報告、決算報告および会計監査報告、2022年度の事業計画案が報告されました。次に、2021年度研究奨励費獲得者による研究成果報告では6件の報告が行われ、続けて日本広告学会「学生広告論文賞」受賞論文の報告がありました。それぞれの報告の後の質疑応答では、教員だけではなく学生による質問、意見交換が活発になされたことが印象的でした。続いて、「コロナ禍と私たちのレジリエンス～学生として、教員として～」と題した学部シンポジウムを開催しました。コロナ禍における生活の変化や新たな挑戦について、教員の立場からは、心理学科の滑川瑞穂先生、教育発達学科の根本淳子先生をシンポジストとしてお迎えし、学生の立場からは、心理学科の茅野呼春さん、白石菜々さん、吉田汐里さん、教育発達学科の長内一世さん、真田純さん、寺嶋匠史さんに話題提供をしていただきました。長引くコロナ禍において、学生も教員も誰もがそれぞれの困難に向き合いながらも、歩みをとめずに過ごしてきたことを確認し合う時間をもつことができ、とても励まされるあたたかな雰囲気につつまれたシンポジウムとなりました。

大会にご参加くださった皆さま、ありがとうございました。





研究奨励報告の様子

広告グループの
メンバー（田中ゼミ）

第9回日本広告学会関東部会広告論文賞【佳作】
「広告メッセージの精緻化が商品評価に及ぼす影響」

広告視聴場面においては、消費者が心理的リアクタンスを感じることや、広告内容をよく吟味できないという問題がある。本研究ではこの問題を解決するため、広告表現によって受け手の心理的リアクタンスを低め、さらに広告内容を精緻化させる工夫の効果に関して社会心理学実験を行い検討した。その結果、広告テーマに対する知識の程度が低い場合でも、受け手が広告を精緻化した場合には、広告企業のイメージが高くなることが示された。消費者が事前知識を持たない新商品の広告展開において、精緻化を促進するための問いかけやクイズ形式の表現を用いる必要性が考察された。

研究奨励事業報告

川端　一光先生（心理学科准教授 ）

白金心理学会第15回大会では、2021年度研究奨励事業における6件の研究奨励費獲得者の研究成果報告が行われました（タイトルは発表時、所属は採択時の情報）。

（1）「大学生のアルコール依存症に対する意識調査 -誤解・偏見と性差-」楊　汐潔（心理学科）、推薦教員：西園マーハ 文教授

（2）「非致死性トラウマ体験後のコーピングと意味づけがPTSRおよびPTGに与える影響」日比　麻記子（心理学科）、推薦教員：森本 浩志准教授

（3）「被援助者人数と実体性が援助意図に及ぼす影響」ハン　ショウグン（心理学専攻博士前期課程心理学コース）、推薦教員：田中 知恵教授

（4）「黙読は音読よりも記憶成績を高めるのか？」熊本　颯雲（心理学専攻博士前期課程心理学コース）、推薦教員：金城 光教授

（5）「オンデマンド授業動画視聴における実態調査と早送り速度が学習効果に与える影響についての実験」岡上　士門（他11名）（心理学科）、推薦教員：金城 光教授

（6）「自発的特性推論における各種性格特性の処理の差異の検討」佐野　秀（心理学専攻博士前期課程心理学コース）、推薦教員：宮本 聡介教授

昨年度と同様にオンラインでの実施となりましたが、参加者との質疑応答も活発に行われ、大変充実した成果報告会となりました。発表の抄録を白金心理学会HP（リンクは下記）にて掲載しておりますので、是非ご参照ください。

また、2022年度研究奨励事業には研究奨励費の枠に3件の応募があり、下記3件が採択となりました。白金心理学会第16回大会にて成果報告を頂く予定です。

（1）「教育と医療の連携と発達障害の校内支援」小出　偲（教育発達学専攻)、推薦教員：小林 潤一郎教授

（2）「年代や性別とマスク着用動機の関連性の検討」笹川　萌々子（他3名）(心理学科)、推薦教員：金城 光教授

（3）「難民の心理社会的適応プロセスの検討－自我アイデンティティ再体制化の観点から－」佐藤　菜月（心理学専攻博士前期課程臨床心理学コース）、推薦教員：西園マーハ　文教授

研究奨励事業への申し込みに関する詳細な情報や、過去の報告要旨を白金心理学会HPに掲載しております。ご応募をお待ちしております。

白金心理学会HP内　研究奨励事業　https://psy.meijigakuin.ac.jp/shiropsy/research/

田中ゼミ学生広告論文賞受賞報告

土屋　貴大（心理学科田中ゼミ4年生）

コロナ禍の中で大学の活動が制約される中で、田中先生からグループで活動する広告研究の情報をいただきました。「広告に興味がある」「大学生活で何かを成し遂げたい」「授業で学んだことを活かしたい」「就職活動で話せる活動がしたい」と感じていたゼミの学生が自主的に集まりました。メンバー全員が初めての研究でしたが、先生がサポートしてくださるとのことだったので安心して参加することができました。

研究のテーマが広告だったので、まずは広告を視聴し、疑問に思ったことをもとに実験計画を立てました。その後、先行研究を探して理論づけをしました。しかし、グループで立てた研究内容や仮説があまり学術的な意義がないというご指摘を頂き、先行研究の結果や理論をもとに実験計画を立てることで意義のある研究にしました。実験はオンラインでデータが集まりやすい環境にも関わらず、なかなかデータが集まらず苦戦しました。しかし、各々のコミュニティを活用し、結果として十分なデータを集めることができました。研究の後半では、対面やオンラインで話し合いを重ね、限られた時間ではありましたが、論文の執筆に取り組みました。

全体を通しては、オンラインでの研究であったため、コミュニケーションが非常に難しく、メンバー同士が困惑する状況もありました。メンバー全員が自発的になること、自分の役割に責任感を持つことを学び、対面以上に活発な研究活動になったと思います。

最後になりましたが、グループで研究を実施し、論文を執筆するという貴重な学びの機会を与えてくださった広告学会関東部会の先生方に、心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

学部シンポジウム 「コロナ禍と私たちのレジリエンス～学生として、教員として～」

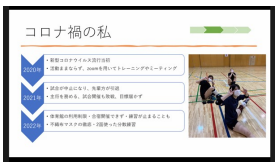
滑川 瑞穂　先生（心理学科専任講師）

今回のシンポジウムでは、新型コロナウイルスに向き合ってきたこの2年間で、心理学部の学生や教員が、大学生活やプライベートでどんな思いを抱き、自分なりにどう乗り越えてきたのかというテーマで講演を行いました。心理学科からは、4年生の茅野呼春さん、吉田汐里さん、3年生の白石菜々さんに、教育発達学科からは、3年生の長内一世さん、真田純さん、寺嶋匠史さんに登壇いただきました。

今回のテーマである「レジリエンス」は、心理学的には、大きな影響を与える事態によって引き起こされた心理的な傷つきから立ち直るための回復力や弾力性を示す用語です。一般的にも、回復力や立ち直る力を意味する語として用いられ、近年注目されている概念といえます。2020年4月に第1回目の緊急事態宣言が発令されてから今まで、状況は徐々に好転しつつありますが、誰もが自身の日常や大切な人との関わりを守ろうと必死に過ごしてきたと思います。

当日の発表からは、体験したことのない日々に大きく動揺しながらも、発表者全員がまさにレジリエンスを発揮して過ごしていたことが伝わってきました。たとえば、オンライン授業でも自宅学習を効果的に継続すること、対面できずとも部活動を運営し続けること、大学から遠く離れた地で日常を維持すること、自粛期間をチャンスととらえて新しい成果を得ることなど、いずれも一人一人が制限のある生活のなかで自分に合う方法を模索していました。危機的な状況に一時的に圧倒されたとしても、自分の内面や現在の状況を再度よく眺めて熟考し、できることから取り組んでいけば、その流れは新しい習慣や考え方として自分の一部になっていくと改めて発見できたシンポジウムでした。

白石菜々さん
（心理学科3年生）
の話題提供



茅野呼春さん
（心理学科4年生）
の話題提供

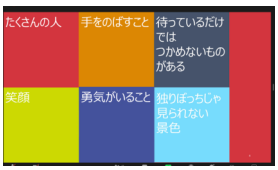
根本 淳子 先生（教育発達学科准教授）

今年度のシンポジウムでは、滑川先生からご報告にもありましたように、教員２名と学生6名からそれぞれがコロナ禍でどのように過ごし、そして、乗り越えてきたのかを共有する機会となりました。

吉田さんは、自粛生活の中で「諦め癖をなくしたい」という目標に向けた取り組みを紹介してくださいました。その一つは学長賞を受賞された学生懸賞論文の執筆でした。白石さんの発表からは、大量の課題に一人で向かう様子が垣間見えました。リズムづくりやオンラインでの交流場面を活用して乗り越え、普通にあったことの大切さの気づきを伝えてくれました。茅野さんからは、バレー部の活動を中心にお話しいただきました。「今、我慢したらこの先もっと良いことがあるかもしれない」という前向きな言葉が添えられていました。寺嶋さんは、できていないことを環境が要因と捉えていた自分を客観視して、仲間の支援を受けながらSC活動などに主体的に取り組む様子を発表くださいました。長内さんからは、帰省先でのオンライン授業の取り組みやお手伝いのご報告からご自身と向き合ってきた様子を共有いただきました。大自然に囲まれた帰省先の風景が素敵でした。真田さんには、コロナ禍で負けそうだった自分の気持ちを語っていただき、サークル活動やSC活動などへ向き合う様子から、自ら手を伸ばして人と繋がろうとすることの大事さについてお伝えいただきました。

変化の激しい日々における葛藤と前進の報告は、参加された方も、ご自身のこれまでを振り返り、さらに、次の一歩を踏み出す機会になったのではないかと思います。本会報が発刊される時期には、コロナウィルス感染症が全世界で猛威を振るいだして3年という月日が経つことになります。今後も、今回のようなお互いの様々な考えや気持ちを共有でき、成長できる学び合う場を大事にしていきたいと強く感じたシンポジウムでした。

長内一世さん
（教育発達学科3年生）
の話題提供



真田純さん
（教育発達学科3年生）
の話題提供

心理学部の思い出

宮﨑　眞先生（教育発達学科教授）

宮﨑　眞先生

2015年4月に着任し2023年3月まで8年間、心理学部に所属し教育研究の仕事に従事しました。学部学科の先生方、教学補佐と助手の皆様、心理臨床センターの助手とカウンセラーの皆様、本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。また、学部生、大学院生の皆さま、本当に有り難うございました。明治学院大学心理学部・教育発達学科に所属したことを誇りに思い、これからの人生を歩んで行きます。

私の職歴は、東京都立特別支援学校(当時は養護学校、以下同じ)に始まり、学芸大学教育学部附属特別支援学校、岩手大学教育学部、最後に明治学院大学心理学部に勤務致しました。振り返ると、楽しかったこと失敗したこと、気恥ずかしいことなど色々なことが思い浮かびますが、43年間仕事を続けられたこと、色々な人に出会えたことに只々感謝という言葉しか思い浮かびません。

学部や学科の先生方や助手教学補佐の皆様とのことを振り返り、まず思い浮かぶことは、距離が近かったということです。この3年間、コロナ感染症のため間接的な関わりが多かったのですが、それ以前は様々な専門分野の先生方と直に仕事をしたり、授業を一緒にすることがたびたびありました。以前は特別支援教育の先生が関係の中心でしたので、視野が広がったように感じました。

楽しい思い出としては、コロナが流行する前まで開催されていた歓迎会や送別会、更に忘年会で美味しい料理や飲み物を頂きながら歓談したことです。また、ここ数年は減ったように感じますが、休日の大学イベントや学科会議が遅くなると、美味しい弁当が配られ、驚いたものです。手の込んだ調理のときには、さすが都心は違うと感じたものでした。

心理学部・教育発達学科の潜在的な可能性は計り知れないと確信しております。心理学部・教育発達学科の特徴の一つに、比較的小集団で親密であることから意思決定と実行が迅速にでき、社会の変化に適用しやすいことがあげられるのではないでしょうか。日夜、教員と助手教学補佐の皆様が奮闘しているわけですが、その努力を続ければ、更にすばらしい研究と教育の場になることでしょう。

終戦後の時期に活躍した特殊学級の先生が「のん気・根気・元気」が教員の資質として大切であると仰ったそうですが、私はこの言葉が好きで、この言葉を思い出すと、気持ちが穏やかになります。人を育てる立場の者は、これくらいのゆとりが必要だと思います。世界情勢が次々に変化し我が国の将来も明るいのか厳しいのか見通すことが難しい中ですが、学生にも教職員にも好かれる素晴らしい学部・学科に発展していくことを祈念しております。

私は特別支援学校でまた大学の臨床指導の場で、知的障害や自閉スペクトラム症の子どもたちに対する行動療法をベースとした個別・小集団指導を長い間行ってきました。教育発達学科でも卒論やゼミ論で臨床指導をテーマにする学生がいたり、土曜日の特別支援臨床実習の学生と共に、子どもと保護者の指導支援に当たりました。近年、学生が選んで発表する研究論文に接するにつけ、特別支援教育の課題や研究テーマが広がっていることに気づかされます。自分の研究テーマや関連する論文以外、必要に迫られない限り自発的には触れないだろう研究論文を紹介してもらうことで、啓発され学びました。私の指導は「のん気・根気・元気」な指導なのですが、期待以上のレジュメを準備し発表する学生に接すると、今の学生はしっかりしていると感心します。先日2年生の最後の授業がありました。授業終了後に手作りの花束を頂きました。ゼミ生以外の2年生から頂くとは思っいなかったので、驚き学生の優しさを改めて感じました。

学生との関わりでは、1年の間に、学生が行う行動や言葉、私が発する言葉や行動に対する学生の反響などが繰り返され、次第に、一人ひとりの学生の性格や指向などが明らかになり、逆に学生も私がどのような人間なのかを理解し、教員と学生とのかけがえのない関係が生まれ、学生が卒業し自立していく。どこまで学生の成長に貢献できたのか…、なかなか評価することが難しいことですが、素晴らしい学生に出会えたことに、感謝し満足を覚えました。学生の皆さんと過ごすことで、閉じこもり固くなりがちな気持ちや思考を柔軟にしてもらえました。これから時間が過ぎたときに振り返ると、大学で学生と文献を読んだり臨床指導をした時間がどのように思い出されるのか楽しみです。

ずっと以前から、卒業生に「見識ある技能・技能ある見識」という言葉を送っておりました。私が退職するにあたり、学生の皆さんにこの言葉を贈りたいと思います。社会人として、バランスのある職業人になってもらいたいという願いからです。

これからは、明治学院大学心理学部と教育発達学科を外部から応援しております。更なる発展を祈念してやみません。

新任教員のご紹介

海津 亜希子先生

海津 亜希子先生

2022年4月より教育発達学科に着任いたしました海津亜希子（かいづあきこ）です。専門は障害科学（心理学）です。前職は国立特別支援教育総合研究所にて、子どもたちのために尽力されている先生方、自治体の教育委員会、文部科学省とともに、特別な教育的ニーズのある子どもが幸せに生きていくための支援システムや教育方法の在り方について追究してきました。なかでもLD（学習障害）等、学習に困難さのある子どもの実態を早期に把握し、科学的根拠に基づいた支援を行う、いわば「つまずかせないための支援」を実現させたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

小林 由利子先生

小林 由利子先生

2022年4月より教育発達学部の教授として着任いたしました小林由利子（こばやしゆりこ）です。専門は、演劇教育学・幼児教育・乳幼児・児童・青少年演劇で、「遊び／ドラマ／演劇循環型連続体」に基づく演劇的手法による保育者養成プログラムの開発と乳幼児のための演劇の特徴の研究に取り組んでいます。現在は、演劇的手法による授業を体験した卒業生で現在保育者をしている人が、大学時代の体験をどのようにとらえているのかについて調査しています。みなさんとのかかわりを通して、新たな知見を拓いていきたいと思っております。どうかよろしくお願い申し上げます。

松嵜 洋子先生

松嵜 洋子先生

2022年4月に教育発達学科に着任いたしました松嵜洋子（まつざきようこ）です。専門は、幼児教育学・保育学・発達心理学です。乳幼児期から小学校低学年の子どもの発達に関心をもっており、乳幼児期の身体を動かす遊びと学び、保育環境の質、幼保小接続等を研究テーマとしています。子どもの健やかな発達につながる実践研究を目指して、幼稚園や小学校の教育現場、行政機関等とも連携を図りながらみなさんと一緒に学びを深めたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

足立 匡基先生

足立 匡基先生

2022年4月より心理学科に着任した足立匡基（あだちまさき）です。専門は発達臨床心理学で、これまでに自閉スペクトラム症(ASD)や注意欠如多動症(ADHD)の早期発見を促すためのスクリーニング尺度の標準化や子どものメンタルヘルスに関する縦断的な調査を行ってきました。ASDやADHDの特性を持ちつつも良好な予後を示す子どもの個人・環境因子の探索や学校を含む行政機関と連携した支援体制の構築等が興味のある研究領域です。これらの知見について、学生の皆さんと一緒に学び、研究したいと思っています。よろしくお願いします。

山田 達人先生

山田 達人先生

2022年4月より心理学科の助教として着任いたしました山田達人（やまだたつと）です。専門は、スクールカウンセリング、認知行動療法、行動コンサルテーションです。不登校予防プログラム、ゲーム依存と関係する考え方の癖や行動パターン、スクールカウンセラーによる認知行動療法の活用、などを研究しています。学内においては、心理実習（学部）や心理実践実習（大学院）といった、臨床心理士や公認心理師に関わる科目を担当しています。どうぞよろしくお願いいたします。

清水 美紀先生

清水 美紀先生

2022年4月に教育発達学科に着任いたしました、清水美紀（しみずみき）です。専門は幼児教育学・子ども社会学で、幼稚園・保育所における保育実践のほか、乳幼児期の子育て、家庭支援と、それらを形づくっている制度・政策にも幅広く関心があります。乳幼児期に限らず、生涯発達を見通して、子どもについて多角的なアプローチから学べる点が、本学部、学科の魅力だと思います。「子ども」という共通の関心を手がかりに、それぞれの専門を持ち寄って、ともに考え、学びを深めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

眞木 瞳先生

眞木 瞳先生

2022年4月より教育発達学科の助手として着任いたしました眞木 瞳（まき ひとみ）です。

明治学院大学社会学部社会福祉学科を卒業後、前職は医療系の公益社団法人に勤務していました。障害児の指導支援や障害児・者のきょうだいの役割について興味・関心があり、本学在学中には特別支援学校の教員免許を取得しました。学生の皆さんが実り多い学生生活を送れるよう、授業補佐等でサポートできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

心理学科SCイベント

SC活動一覧

4月	・フレッシャーズ研修
6月	・教育発達学科：春学期新入生交流会
7月	・心理学科：春学期オンライン交流会・相談会
11月	・心理学科：新SC募集のための説明会 ・教育発達学科：秋学期新入生交流会
1月	・大学院：心理学研究科交流会「院生とお話ししましょう！」

学生部会SC活動報告

＜心理学科SC＞

学生部会心理学科SCは、新入生・在学生のサポートを目的として活動しています。今年度から対面で行うことができると考えられていたフレッシャーズ研修は、再びの感染拡大により残念ながらzoomでの開催に逆戻りしてしまいました。7月に実施した春学期交流会もzoomでの開催となりました。

しかし、参加者からは楽しかったという感想をいただくことができ、少しでも役に立てたのではないかと考えております。

今後も心理学科SCは新入生・在学生が充実した学生生活を送れるように支援を行っていきますので、引き続きご支援ご協力の程、何卒宜しくお願いいたします。

＜教育発達学科SC＞

教育発達学科SCでは、新入生の交流の支援を目的とした活動を中心に行っております。昨年度とは違い、今年度は対面での活動を中心に行うことができました。今年度は2度交流会を開催し、秋の交流会では、久しぶりの参加者全員対面で開催しました。対面ならではの良さを実感することができ、参加してくれた1年生も満足していただきました。

21PEの代は非常に仲が良く、そのおかげで助けられた部分が多くありました。代表としてさらに責任を強く持ち、全員が充実した時間を過ごせるように精進していきます。今後ともよろしくお願いいたします。

＜大学院SC＞

大学院SCは2023年1月27日（金）に「院生とお話ししましょう！」を開催しました。残念ながら、昨年度に引き続き、オンライン開催となりましたが、臨床心理学系の大学院へ進学を検討する心理学部生の疑問を解消し、キャリアプランのサポートを行うことができたと考えております。参加者からは「大学院のイメージがより具体的になった」、「これまで先輩との交流がなく、手探りの状態だったため、体験談やアドバイスをいただける貴重な時間となった」と感想が集まりました。今後も大学院生と学部生の交流を増やせるような活動を行う所存ですので、ご協力のほどよろしくお願い致します。

第16回大会のご案内

野末　武義先生（心理学部長）

2023年度の白金心理学会第16回大会は、6月11日（日曜日）午後に白金キャンパスにて久しぶりに対面で実施の予定です（ただし、状況によってはオンライン開催に変更の可能性もあり）。2022年度研究奨励費獲得者による研究成果報告3件の他、学部シンポジウムとして「Withコロナ社会でのこころと学び」を開催します。コロナによって私たちは多くのものを失った一方で、新たな可能性を模索しているさなかでもあります。シンポジウムでは、心理学科および教育発達学科それぞれから学生2名ずつと教員1名ずつが話題提供をしていただく予定です。皆さんとこれまでの経験を共有し、理解を深め支え合う時間になればと思っています。多くの在校生、卒業生、修了生の皆さんのご参加をお待ちしています。

事務局よりお知らせ

○教員の動向

2022年度で退職される先生

教育発達学科：松永 あけみ先生、宮﨑 眞先生

2023年度研究サバティカルの先生（2023年度は出校されませんので、ご注意ください。）

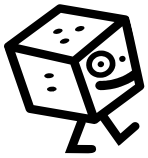
心理学科：野村 信威先生、森本 浩志先生

○白金心理学会ホームページ

白金心理学会事務局からのお知らせ、白金心理学会が主催するイベントのお知らせ（在学生、卒業生向け）、広報紙「さいころ」のバックナンバーなどを掲載しています。また、連絡先の変更や大会の申込みなどもホームページから行うことができます。スマートフォンからも閲覧できますので、是非一度ご覧ください。

○卒業後連絡の取りやすいメールアドレスのご登録をお願いします！

白金心理学会ＨＰより変更可能です。大会や学会情報がニュースレターでお知らせできるよう、ただいま準備しておりますので、ぜひご協力をお願いします。



発行：
明治学院大学心理学部
白金心理学会 事務局

〒108-0074
東京都港区白金台1-2-37
明治学院大学
心理学部共同研究室内

TEL＆FAX:
03-5421-5814
問い合わせ用E-mail：
shinro@psy.meijigakuin.ac.jp
白金心理学会ホームページ
URL：https://
psy.meijigakuin.ac.jp/shiropsy/